

看護師による終末期小児がん患者と家族のQOL代理 評価尺度の開発とQOL評価

著者	名古屋 祐子
号	86
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	医博(看)第13号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123373

氏 名	なごや ゆうこ 名古屋 祐子
学 位 の 種 類	博士 (看護学)
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 24 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項
研 究 科 専 攻	東北大学大学院医学系研究科 (博士課程) 保健学専攻
学 位 論 文 題 目	看護師による終末期小児がん患者と家族の QOL 代理評価尺度の 開発と QOL 評価
論 文 審 査 委 員	主査 教授 塩飽 仁 副主査 教授 宮下 光令 副査第一 教授 佐藤 喜根子 副査第二 教授 仁尾 正記

論 文 内 容 要 旨

【目的】本研究の目的は、終末期小児がん患者と家族の QOL の核になることとその構成概念を明らかにし、それらの結果をもとに看護師による QOL 代理評価尺度 (GDIP) の開発を行うこと、および GDIP を用いて QOL の現状を定量的に評価することである。

【研究方法】全国の小児がん治療施設の医師と看護師に対して質問紙調査を行い、終末期小児がん患者と家族の QOL の核になることを抽出した後、探索的因子分析を用いてその構成概念を明らかにした。次に、その構成概念に基づき、QOL 代理評価尺度である GDIP の原案を作成し、調査日から3年以内に小児がんで亡くなった患者1名につき2名の看護師に対して質問紙調査を行った。GDIP 原案の項目分析を行った後、確認的因子分析を用いたモデル適合性の検討と並行して評価者間信頼性の検討を行い、GDIP 修正案を作成した。その後、GDIP 修正案の再テスト信頼性、内的整合性、Multitrait Scaling 分析による構成概念妥当性を検討した。最後に、開発した GDIP を用いて QOL の現状を定量的に評価するとともにその関連要因を検討した。

【結果】医師と看護師合わせて427名から得られた回答から、終末期小児がん患者と家族の QOL の核になるものとして、53項目を抽出し、探索的因子分析により、15ドメイン47項目の構成概念を明らかにした。代理評価の対象患者53名分の結果から、GDIP の信頼性・妥当性を検討し、患者用8下位尺度22項目、家族用3下位尺度13項目、きょうだい用1下位尺度3項目からなる GDIP には一定の信頼性・妥当性があることが確かめられた。各下位尺度名は、患者用が「からだや心の苦痛が緩和されていること」「遊び学べること」「思い出づくりや望みを叶えること」「できる限りこれまでと同じように過ごすこと」「医療者と良好な関係で過ごすこと」「家族と過ごすこと」「最小限の医療環境で過ごすこと」「家族に見守られながら穏やかに最期を迎えること」、家族用が「家族内・医療者と情報を共有すること」「心理社会面への支援が受けられること」「親役割を達成すること」、きょうだい用が「きょうだい支援が受けられること」とした。GDIP を用いた QOL の定量的評価の結果、GDIP 患者用の得点は、「からだや心の苦痛が緩和されていること」の下位尺度得点が最も低く、平均点が高い項目はからだの苦痛による影響が少ない項目であった。また、GDIP 患者用の得点は患者の死亡場所と関連しており、いずれの得点も死亡場所が自宅の場合に最も高かった。

【考察】GDIP は一定の信頼性と妥当性が確かめられた日本の終末期の小児領域における初めての QOL 尺度である。本尺度は38項目で構成されており、より多側面から包括的な評価が可能と考えられる。QOL の定量的評価によって、GDIP 患者用の「からだや心の苦痛が緩和されていること」の得点が最も低く、平均点が高い項目は、からだの苦痛による影響が少ない項目であったことから、苦痛緩和が不十分な現状があると考えられる。また、GDIP 患者用の得点は死亡場所と関連しており、最期の時間を過ごす場所を検討することの重要性が示唆された。

審査結果の要旨

博士論文題目 看護師による終末期小児がん患者と家族の QOL 代理評価尺度の開発と QOL 評価

所属専攻・領域名 保健学専攻 ・ 家族支援看護学領域

学籍番号 B3MD2007 氏名 名古屋祐子

近年、終末期においてもケアの質の保証や向上が取り上げられるようになった。また、終末期ケアの質として、QOL および QOL 評価が重視され、アウトカム指標としての終末期 QOL の構成概念が明らかになり、QOL の測定が可能になった。一方で小児がんは子どもの死因の上位を占め、より質の高い小児緩和ケアおよび終末期ケアが子供のみならず遺される子供の家族にとっても重要であるにもかかわらず、終末期小児がん患者と家族の QOL の構成概念の解明や客観的評価方法の開発は取り組まれていない。

このような背景を踏まえ、本研究は①終末期にある小児がん患者とその家族の QOL において大切なこととその構成概念を明らかにする、②看護師による終末期にある小児がん患者とその家族の QOL 代理評価尺度の作成および QOL 代理評価尺度の信頼性・妥当性の検証を行う、③QOL 代理評価尺度を用い、終末期にある小児がん患者とその家族の QOL を定量的に明らかにする、を目的として取り組まれた。

本研究は、目的①に対して、終末期の小児がん患者の QOL において大切なこととして 35 項目、QOL 構成要素として 12 ドメイン 29 項目を、また家族の QOL において大切なこととして 18 項目、QOL 構成要素として 3 ドメイン 18 項目を明らかにした。

次いで目的②に対して、前項の成果に基づき、看護師による終末期にある小児がん患者とその家族の QOL 代理評価尺度の作成に取り組み、小児がん患者とその家族の QOL を数値評価できる国内初のスケールとして GDIP（Good Death Inventory for Pediatrics）患者用・家族用をそれぞれ完成させた。

最終段階では目的③に対して、検証研究として終末期にある小児がん患者とその家族の QOL 評価に臨み、調査、分析の結果、苦痛の緩和、遺族支援やきょうだいケアなどが十分とは言えない状況を抽出することに成功した。

以上から、本研究は、明らかにした要素や概念、作成した GDIP が、看護師による終末期小児がん患者と家族の QOL 代理評価として活用できることを実証し、終末期にある小児がん患者とその家族の QOL 向上に資することを明確に示したと言える。

よって、本論文は博士（看護学）の学位論文として合格と認める。